

きれいな校舎の前で記念撮影する本吉響高校の生徒ら。いずれも8月、フィリピン東ネグロス州、ボランテアの古川勝利さん提供



気仙沼発 恩返しの旅

比の被災地 仮校舎の塗装に汗

高校生「逆に励まされた」

東日本大震災で被災した宮城県気仙沼市の県立本吉響高校の生徒たちと、昨年2月にフィリピンで起きた地震で被災した子どもたちとの交流が進んでいる。今夏には生徒7人が同国の被災地を訪ね、小学校の仮校舎の塗装に汗を流した。



絵が得意な美術部長の鈴木美緒さん(17)がフィリピンの国の花、木、魚をモチーフに外壁に描く絵を考えた。「子どもたちにも分かりやすく、明るい感じ」を心がけた

2011年3月11日、気仙沼市は大震災による津波に見舞われた。本吉響高校の生徒も、家族を亡くしたり、家を失ったりした。高校は遺体の安置所にもなった。

同年5月、被災地支援のボランテアと呼ばれる活動で、フィリピンの東ネグロス州の小中学校約500校に募金箱が設置された。子どもたちが昼食代を削って小銭を入れた。集まった総額6万バ(約13万円)に、大人からの寄付を加えた費用で、豊約3500枚が宮城県内の被災地に贈られた。

12年2月6日。フィリピン中部で地震が発生し、1000人を超す死者・行方不明者が出た。住宅4千棟が全壊。東ネグロス州の子どもたちも被災した。

「今度は自分たちが何かしたい」。本吉響高校の生徒らは、被災した子どもら

に励ましの手紙を送った。現地との縁を取り持つべく、ボランテアを通じ、小学校の仮校舎の塗装作業もすることにした。

今年8月、同校の2、3年生の男女7人がボランテアらとともに東ネグロス州を訪ねた。

被害の大きかったラリベルタッド町の四つの小学校を4日かけて回った。被災後1年半たっても崩れたままの建物や橋が目立った。

仮校舎は、近くの林から切り出したヤシを柱にし、倒壊した校舎からはがした屋根や天井板を再利用して建てられていた。ペンキを塗れば、防水性、防汚性を高められる。

生徒らは、内壁を白く塗り、外壁を黄で塗ったうえで花や魚の絵を描いた。炎天下の作業。当初は「農機具の倉庫みたい」だった仮校舎が、「思わず立ち止ま

る立派な学校」になった。東北の被害は現地でも知られ、校長の一人は「あのミヤギから助けに来てくれたと感謝した。3600名離れたフィリピンから帰国した生徒たちは「励ますつもりで行ったのに、逆に励まされた」と口をそろえた。家を失った現地の子どもたちはヤシの葉で屋根をふいただけの粗末な小屋で暮らす。水道も電気もない。津波で家を流され、仮設住宅で暮らす鎌田大輝さん(16)は「蛇口をひねれば水が出るのがあるが、たさを実感した」。やはり仮設住宅に住む高橋菜都美さん(18)は「それでも彼らは笑顔を保つやさない。私もよくよしていかない」。

同行した阿部久美教諭(41)は「東日本大震災からの復興を担うのはこの世代。自分たちにもできるという経験を生かしてほしい」と話す。生徒らは帰国後、東ネグロス州の高校生とフェイスブックでつながり、英語で近況を報告し合っている。10月の文化祭で、現地の被災状況や暮らしぶりを発表する予定だ。(古城博隆)